

不自然な学生たちのために：『あもーる あもれいら』の発見¹

For the sake of Unnatural Students: The Discover of “AMOR AMOREIRA”

岡村 淳²

Jun Okamura

〈はじめに〉

在ブラジルの記録映像作家の岡村淳です。このたび私用がメインで訪日した折に旧知の津田陸美先生からお招きにあずかり、西暦2024年5月9日に関西学院大学三田校舎の総合政策学部メディア情報学科の特別講義として拙作『あもーる あもれいら 第二部・勝つ子負ける子』（製作国：ブラジル 製作年：2008年 1時間45分 製作・構成・撮影・編集・報告：岡村淳）を上映していただきました。

私は自作の公開上映の際には現場に立ち会うのを原則としています。参加者の上映中のリアクションをうかがうのがその目的のひとつです。今回は広いチャペルが会場でしたので位置を変えながら観察しましたが、居眠り・私語・スマホ見もまれで、ほとんどの学生が銀幕に見入り、些細なシーンにもわが意を得たりの反応がある。これはいい視聴者たちに恵まれたなと感じましたが、それは上映後の質疑、そしていただいた感想文からも十分に確認できました。津田先生からは「こんなに学生たちが挙手して質問をするとは思わなかった、もっと岡村さんに回答を短くしてもらってより多くの学生の声が聞きたかった」とのことでしたが、これは担当教官としても制作者の私としても「うれしい悲鳴」というものです。いただ

いた感想文に「人生に正解はないんだな」という言葉がありましたが、こうした言葉を学生から引き出せる作品をつむぎ、お届けすることができない、まさにドキュメンタリー屋冥利に尽きるというものです。

以下、この作品と上映のバックグラウンドを記しましょう。

〈なぜ『あもれいら』か〉

今回の上映作品は時間枠と学生たちの関心がかんがみて、津田先生と津田ゼミ所属の日系ブラジル四世の田中アリーネ愛弓さんに数あるわがフィルモグラフィのなかからいくつか選んでもらい、私のサジェスチョンを加味して決定しました。

『あもーる あもれいら』は全三部作で、ブラジル南部のパラナ州内陸にある São Sebastião da Amoreira（桑の木の聖セバスチャン）という小さな田舎町にある経済的に貧しい家庭の子供たちの通う保育園の西暦2005年の一年間にわたる記録です。当時、日本の長崎に本部のあるカトリックの女子修道会・純心聖母会のブラジル支部のシスターたちがこの保育園で奉仕活動をしていました。

私は1990年代からパラナ州のさらに奥地での土地なき農民と呼ばれる人たちの活動を記録し続け

¹ 本稿は2024年5月9日(木) 本学神戸三田キャンパスでの講演をもとにしたものです。

² 記録映像作家



『あもーる あもれいら』三部作の広報用イメージ画
(画：綱本武雄 文：岡村淳)

ていて、その道中にあるこの町の保育園の存在を知りました。長距離運転の旅の途中でここに立ち寄り、子供たち、そしてシスターたちの活動に親しむにつけ、ここで覚える感動を自分の祖国の人に伝えたい・共有したいという思いが湧きあがってきました。

〈テレビから遠く離れて〉

私は、もとは日本のテレビドキュメンタリーの番組ディレクターでした。当時、人気を博した大アマゾンシリーズの担当となり、毎年、ブラジルをはじめとする南米に派遣されているうちに、少しでも気の利いたドキュメンタリーを作りたいという思いから、これといった見通しもないままフリーとなってブラジルに移住してしまいました。その後、小型ビデオカメラを用いた一人取材に開眼して、さらにテレビ放送をあてにしない自主制作をはじめて今日に至っています。

アモレイラの保育園を知った時、当初は日本のテレビ向けの企画も考えました。しかし日本のメ

ディア向けのウリがありません。飢えや疫病、戦乱などで子供たちがばたばた死んでいくといったセンセーショナルなこともなければ、女優かと思いがうようなシスターがいるわけでもありません。そもそも日本のテレビでは、テーマや背景に宗教のある企画はタブーでした。当時、日本を代表する放送局がインドのカトリック修道女・マザーテレサを主人公にした45分の情報番組を放送しましたが、番組で「キリスト教」やその教祖の「イエス」の名前が見事に排除されているのに驚いたものです。

自主制作を行なうとしたら、その経費をどうするか。日本の修道会本部に持ち掛けてみれば、ある程度のサポートが望めるかもしれません。しかしそうすると内容も修道会に付度することになりがちで、オカムラも宗教のプロパガンダで食うようになったか、と見られてしまうことでしょう。

それでも宗教とは、信仰とはなにかを宗教者の最前線の現場で見つめて考えてみたい。そして自分で納得のいく取材となれば、保育園に一年間は寄り添ってみたい。外働きをする妻とやりくりしながら学童二人を抱えて家庭を切り盛りする主夫として、経済的な見返りも発表のあてもない取材のためにサンパウロのわが家から500キロあまりの距離のアモレイラまで一年にわたって通い続けるというのは、自分にとってはいささか無謀な試みでもありました。

〈アモレイラの光と影〉

この地方はサトウキビや大豆、綿など国際的な価格の高い作物や果樹などの大農場が広がっています。現地での仕事といえばこうした大農場での短期間の単純労働が主です。1970年代半ばにこの町にマルゴット神父というベルギー人の神父が赴任しましたが、当時は乳幼児の死亡率が高く、町の墓地には赤土の小さな土饅頭が林立していたとい



アモレイラの保育園で取材中の筆者（西暦2005年）

います³。農場で働く母親が乳児を預けるともなく農場に連れて行って日射病で死なせてしまうというような事態も生じていました。マルゴット神父は自宅の神父館を託児所として開放して、これがアモレイラコミュニティセンターという保育園へと成長していきました。

私の取材時には0歳児から6歳児まで約100人ほどの乳幼児がこの保育園に通っていました。私もサンパウロでわが子の保育園の送り迎えをしたり、園に頼まれて活動の撮影などもしていましたので、サンパウロの都市部の保育園の様子にはなじみがありました。サンパウロの町の子供たちは日本の保育園とさして変わらない感じです。ところがアモレイラの子供たちは違いました。私のような客人が現れると大人数でエネルギーに取巻き質問攻めにしたり、私の体や備品をいじくりまわします。「田舎の子供たちは、なんと元気なことだろう」ぐらいのおめでたい感想を他の訪問者同様、私も抱いていました。

いっぼう少しずつシスターたちが明かしてくれる話には、言葉もありませんでした。そもそも両

親とも揃っている子供は三分の一程度で、残りの三分の二はシングルマザー、あるいは祖父母などに育てられ、やはりマルゴット神父の始めた孤児院から通っている子供もいました。父親が母親を殺してしまった家庭。毎晩、母親が不特定多数の男を連れ込んでくる家庭。親とともに覚せい剤をたしなむ子供。私には想像もできないようなトラウマを抱えた子供たちが、人なつっこく陽気で元気いっぱいに見えるのはなぜだろう？ そんな関心も抱えての手探りの取材が始まりました。

〈アモレイラの群像劇〉

アモレイラでの取材を手掛ける前の私は、おもにブラジルの日本人移民を主人公として、その人のもとに何度となく通って時間と生活をともにしながら作品をつむいでいくというのがもっぱらでした。初めから主人公は決まっています。ところが今度はまるで勝手が違いました。シスターたちだけで4人、これは園長でもあるシスターヴィンセンチア堂園⁴がメインになりましょうが、子供たちは100人近く、しかも年齢ごとのクラスに分かれています。これはと思う子供をマークして取材をしても、次回に訪問した時には家族ごと消息不明になってしまった、ということもしばしばでした。「神のみぞ知る」の境地です。リサーチャーや助手がいるわけでもないひとり取材ですので、現場ではひたすらひとりで0歳児から年長組までの各部屋をまわり続けます。そして子供たちひとりひとり、さらに職員や保護者たちと、これまでの老日本人移民や先住民、土地なき農民たちと接した時と同様に個々の尊厳を心に留めて付

3 私のYouTubeチャンネル「チャンネル岡村淳」に日本語の堪能だった生前のマルゴット神父のインタビュー記録『さまよう人とともにマルゴット神父にきく』をアップしてあります。

<https://www.youtube.com/watch?v=6v0iscpzuAg>

4 同上チャンネルに三部作の撮影を終えた後でシスターヴィンセンチア堂園に行なったインタビューをまとめた記録『こんな世界を心にとめてアモレイラの堂園シスターに聴く』があります。

<https://www.youtube.com/watch?v=ZhD9th4SP4c>

き合いを続けたつもりです。

〈四宮監督の笑い〉

私の作品の同業者として最も深い理解者だろう大先輩の四宮鉄男監督は、この作品を見て笑ってしまったと言います。たかが異国の保育園の記録が、ドキュメンタリー映画として成立してしまったことが、いい意味で可笑しかったそうです。しかも、それが三部作にまでなるとは！

そもそも私自身が作品として成り立つのかどうかも疑問のまま撮影をすすめました。一年の取材を終えて編集をにとりかかると、とてもせいぜい2時間弱ぐらいの「普通の」映画の尺には収まりそうもないことに気付きました。せっかくのなんの制約もない自主制作なのだから、納得のいくようにまとめてみよう。当時、『ロード・オブ・ザ・リング』という映画が世界的にヒットをしてブラジルのわが子も熱中していました。この映画の監督のインタビューによると、映画は全体で10時間近くの長さになってしまったので、話の始まりから区切りのいいところで分けて三部作としたと言います。よし、こっちもその方法でいこう。こうして新学期から学年末までの物語を区切りのいいところで分けて『第一部・イニシエーション』（西暦2007年完成）、『第二部・勝つ子負ける子』（西暦2008年完成）、『第三部・サマークリスマスのかげで』（西暦2012年完成）と題してみました。

黒澤明監督は、自身の最高傑作はと問われると常に「次回作」と答えていました。私はいまだ現役のつもりですが、さすがに体力も気力も下り坂で、今後最高傑作をつくる自信はあまりありません。いっぽうわが40代の一年を撮影にかけたこのシリーズは最高かはともかくとして、自分の代表作のなかに挙げていいと思っています。三部作のなかでは第一部もそれなりの面白さがあると思いますが、私自身がまだ子供たち、そしてシス

ターたちとの距離感をつかみきれていない感があり、第二部と第三部はいずれも甲乙つけがたい奇跡的な作品だと思っています。

〈勝ち組 負け組〉

『第二部・勝つ子負ける子』の後半は保育園での年に一度のお話し大会のエピソードが中心で、このタイトルの由来でもあります。生徒たちが覚えた言葉をひとりずつ会場で発表して、それに順位が付けられて上位の子供には賞品がもらえます。この勝ち負けをめぐる大騒ぎとなりますが、堂園園長は「負けることを学ぶことも大切」と語ります。

この作品をまとめた西暦2008年は、ブラジル日本人移民100周年記念の年でした。日本から皇族もやってきてイベントが繰り広げられ、日本人移民のブラジルへの貢献といったきれいなご褒美がもてはやされました。いっぽう私は移民史の負の部分からこそ学ぶべきだと考えています。

第二次大戦後、ブラジルの日本人移民の大半は日本が戦争に勝ったと信じ込みました。日本戦勝を報じるフェイクニュースが日系人の間に伝わり、その証拠だという写真や動画までも流布しました。日系社会は「勝ち組」「負け組」に分裂して、勝ち組たちは負け組へのテロ殺人事件を繰り返しました。事態の鎮静とともに勝ち組たちは狂信者とされてきましたが、近年では祖国日本からも勝ち組へのシンパシーの声が強まっています。

人生に正解はなければ、勝ち負けも相対的なものでしかない。コロナ禍を経て受験戦争を勝ち抜いて関学に学び、これから就職戦線に向かう皆さんにこのことを伝えたくて、この作品を選びました。

〈不自然な学生たちのために〉

ラテンアメリカ映画研究者の新谷和輝さんの「不自然な観客のために」(批評誌『エクリヲ』vol. 15) という論考を最後に紹介しましょう。

「私たちはその映画が『どこで作られているか』を見るだけでなく、『誰に向けられているか』を問うた方がよいのではないだろうか。顔のない無数の消費者に奉仕したり、西欧の映画祭に媚びを売ったりする映画ではなく、放っておけば隠されて忘れ去られていく個人や場所、記憶、歴史、感情のためにこそ作られている映画。」

「彼らの映画は世界に迎合するのではなく、世界のほうを自らに引き寄せようとする。」「そうして触発されたどこかの観客が、偶発的なネットワークを形成することもあるだろう。」

『あもーる あもれいら』をご覧になった関学の学生さんは、まさしく「不自然な観客」といえると思います。皆さんはこの映画も岡村淳という映像作家の存在も、今回の上映の機会がなければ、おそらく永遠に知る機会はなかったことでしょう。

津田先生のプロデューサーとしての慧眼に敬服し、彼女との友情に感謝するばかりです。